

尾河直哉（おがわ なおや）



1958年東京生まれ。

早稲田大学文学研究科博士課程単位取得退学。

カーン大学高等研究免状取得。

現在、日本女子大学、武蔵野美術大学ほか講師（フランス語、イタリア語、ポルトガル語）。専門はフランス文学、ロマンス諸語文学。

訳書に『バルザック伝』（アンリ・トロワイヤ著、白水社、1999年）、『地中海の記憶』（フェルナン・ブローデル著、藤原書店、2008年）、『丁子と肉桂のガブリエラ』（ジョルジュ・アマード著、彩流社、2008年）、『快樂の歴史』（アラン・コルバン著、藤原書店、2011年）、『カオス・シチリア物語 ピランデッロ短編集』（ルイージ・ピランデッロ著、共訳、白水社、2012年）ほか多数

カルメン。この名前をご存知ない方はいらっしゃるでしょう。ジョルジュ・ビゼーの歌劇（脚本はアンリ・メイヤックとリュドヴィック・アレヴィ）が大成功をおさめ、このジプシー女の名は世界中に広まりました。派生した演劇や映画となれば枚挙に暇がありません。今や、クリエイターが自らのファンタジーを自由に投入できるストック・キャラクターになった観さえあります（ゴダール監督のカルメン＝マルーシュカ・デートメルスと木下恵介監督のカルメン＝高峰秀子のあいだにどれほどの共通点があるのでしょうか？）。

「通俗性」という言葉にはなにか軽薄な響きもありますが、歌劇「カルメン」の音楽と構成のメロドラマ的な通俗性がしたたかな魅力を湛えていることは否定できないでしょう。心変わりする魔性の女カルメンに対するに、ドン・ホセを一途に思う清楚なミカエラ。女たらしの浅薄な闘牛士エスカミーリョに対するに、カルメンを思い切れないこれまた想い一筋なドン・ホセ。ミカエラを振り切ってカルメンとともにアウトローの世界に入ってしまったドン・ホセが、エスカミーリョにたいする嫉妬からカルメンを殺す——このシンプルな対称的構図と力学が導く悲劇は、二時間半でだれもが理解し、納得し、楽しめる要素を見事に備えています。

しかし、19世紀フランスの作家プロスペル・メリメによる原作は、歌劇とは趣や味わい、いや、ストーリーさえかなり違っています。舞台はほぼ山中ですし、純情な村の娘ミカエラもいません。歌劇では大きな役割を担っていたエスカミーリョにあたるルーカスもはるかに滑稽な端役で、なによりドン・ホセはカルメンより先に「夫」である片目のガルシア（歌劇には出てこない）を殺している。そして歌劇との最大の違いは、原作がいわゆる枠構造を備えた小説であるという点です。ドン・ホセの情痴殺人物語は、実は、ドン・ホセがスペインに調査旅行中の「私」に語って聞かせる話（三章）なのです。その枠部分（一章、二章および四章）ではジプシー（ロマ）やバスクにかんする言及もさかん

になされています。つまりヨーロッパ社会における異人たちとの遭遇の物語が、この原作『カルメン』だと言ってよいかもしれません。その魅力は歌劇の魅力とはまったく別のところにありそうです。

『カルメン』はたびたび邦訳されてきました。めぼしいものだけでも、堀口大學訳（新潮文庫）、杉 捷夫訳（岩波文庫）、平岡徳頼訳（講談社文芸文庫）、工藤庸子訳（新書館）があります。いずれ名だたる名訳です。しかし、翻訳とは畢竟ひとつの「読解」であり、「演出」にはほかなりません。必然的に個々それぞれの「読解」があり、「演出」があるはずです。その点で、新訳のチャレンジャーにもまったく平等にチャンスが与えられているとはいえないでしょうか。わたしたちも「わたしたち自身」の新たな『カルメン』読解を示し、「わたしたち自身」の『カルメン』を演出してみませんか？ そして「わたしたち自身」にとってこの名作がいったいどんな魅力をもつのか、一緒に探ってみましょう。